

こうさいだより

2013年
新春号



「五箇山の冬」

絵 田原 忠男

❖ 新年のご挨拶

(社)北陸建設弘済会 理事長
北陸地方整備局長

2

❖ 特集「地域とともに」

第17回「北陸地域の活性化」に関する
研究助成事業活動状況紹介

4

NPO法人女性みちみらい上越
長野県飯山北高等学校同窓会

❖ 北陸再発見

糴と米でつくられる甘酒「糴ドリンク」

8

❖ シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

須坂景観づくりの会(長野県須坂市)
岩瀬まちづくり株式会社(富山県富山市)

12

❖ 会員だより

14

❖ 伝言板

16

新年のご挨拶

(社)北陸建設弘済会 理事長

おおばやし こうじ
大林 厚次



新年明けましておめでとうございます。

会員皆様におかれましては、健やかに新年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

北陸の冬になくてはならないものはやはり雪です。その量は程々が良いのですが、昨年は近年にない豪雪で高速道路や鉄道等の多くの交通機関はほぼ全線マヒ状態、幸い直轄国道は通行止めする事なく交通確保したことにより、広域的な物資の輸送も滞る事なく、国民生活への影響を最小限にとどめることができたようです。

今年の予想は如何に、气象台は低温多雪、かの有名なカマキリ博士は昨年を上回る大雪とあり、いずれも大雪の予想だけに今から物心両面の備えをしっかりと生活への影響を最小限にしたいものであります。

備えがあれば防ぐことが出来たかもしれない、年末の中央自動車道上り線の笹子トンネル内での事故。換気用のコンクリート製天井板が突然の崩落、9名の尊い命を奪った悲惨な事故がありました。この事故により大動脈の交通止めが長期に亘ることから物流の滞り等により経済にも少なからず影響が予想されます。当該トンネルは昭和52年に完成、35年経過し定期的な点検も行われていたようではありますが、結果として大惨事になってしまいました。

国内には高度成長期に整備された多くの橋梁やトンネル等があり、点検は勿論のこと適時・適切な維持・更新がなされなければ同じ惨事が再び起こり得ます。その為にも各管理者の管理水準や予算の確保が可能となる仕組みづくりがなされなければ、安全・安心な国土づくりの実現は難しいのではないかと、改めて考えさせられた事故でありました。

このことについては、各所で長寿命化修繕計画やLCC、アセットマネジメント等の観点から検討がなされておりますが、これを機会に本格的な事業計画策定に繋がる取り組みが望まれるところであります。

弘済会の今後については、平成22年の国からの要請である「業務からの撤退」について、課題、問題整理を含め種々検討を行い、その都度各年度の通常総会で審議頂き進めてまいりました。昨年5月の通常総会では、今後の対応方針について「①業務からの撤退は平成25年度中に新会社を設立し、事業譲渡手法により平成25年度中に工事監督支援業務から新会社に譲渡を行い、残余業務については平成27年度末までを目途に逐次行う」「②一般社団法人への移行については平成24年度上期に内閣府へ移行申請を行い、認可後平成25年4月1日付けで移行登記を予定」を提案し決議いただいたところであります。

現在の進捗状況は、一般社団法人の移行申請につきましては、昨年の8月に内閣府に申請したところであり、追加調査に対応しているところであります。又、平成25年度中の新会社の設立や事業譲渡については、専門家等の意見を踏まえつつ、全国の弘済会・協会とも連携をとりながら準備を進めているところであります。併せて、新年早々には平成25年度業務の入札契約の手続きが始まり、新年度業務の獲得に向け職員一丸となって取り組んでいるところであります。会員の皆様には引き続きご指導、ご鞭撻をお願いし新年のご挨拶といたします。

年頭のご挨拶

北陸地方整備局長 はしば 橋場 かつじ 克司



平成25年の新しい年を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

(社)北陸建設弘済会の会員の皆様方には、平素より国土交通行政の推進にご支援とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年は北陸地方整備局所管事業におきまして、日本海沿岸東北自動車道(朝日～温海)に関する都市計画決定・環境アセスメント手続きの着手、新潟港東港区国際海上コンテナターミナル西ふ頭4号岸壁や伏木富山港臨港道路富山新港東西線(新湊大橋)の供用開始、信濃川・阿賀野川・神通川・庄川における堤防液状化対策工事の着手など地域経済の活性化や地域の安全・安心の確保に向けて着実な進展がありました。

政府は、昨年8月に社会資本整備重点計画を閣議決定し、真に必要な社会資本整備を着実に推進するため、「選択と集中」の基準を踏まえ、「大規模又は広域的な災害リスクの低減」、「我が国産業・経済の基盤や国際競争力の強化」、「持続可能で活力ある国土・地域づくりの実現」、「社会資本の適確な維持管理・更新」という4つの重点目標を設定しました。

これを受けて北陸でも地方公共団体や有識者等から意見を伺いながら、今春を目途に北陸ブロックの社会資本の重点整備方針を策定し、地域の活性化や安全・安心のための防災力の強化などを重点に、引き続き河川、道路、港湾などの整備に努めて参ります。

既存施設においては、老朽化や高齢化が確実に進行しており、社会資本の戦略的維持管理や施設の長寿命化を含めた維持更新技術の確立も急務となっております。特に日本海に面する北陸地方の橋梁は部材の疲労のほか、冬季風浪や凍結防止剤散布による塩害やアルカリ骨材反応により著しい損傷等があることから、産学官が連携して橋梁保全に関する調査・研究、施工技術、材料、維持管理などについて、情報交換・発信する場として、新たに「北陸橋梁保全会議」を立ち上げることであります。

公共事業の執行に当たっては、「選択と集中」に基づき、限られた予算で最大の効果を上げるため、地方公共団体をはじめ経済界、大学、地域づくりなどの団体との情報交換や連携を幅広く進めて参ります。入札契約においては公平性・透明性の向上、工事や業務の実施にあたっては品質確保対策と生産性の向上、建設技術の向上に関しては新技術活用や情報化施工に積極的に取り組み、地域の皆様から大きな期待を寄せられている社会資本整備を着実に進めて参ります。

会員の皆様には、引き続き北陸地方整備局並びに職員に対して一層のご支援・ご助言をお願いいたしますとともに、本年もご健勝で活躍されますことを祈念申しあげまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

特集 地域とともに

第17回「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

北陸建設弘済会は、平成7年度から、「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業を開始し、地域の活性化の芽を育て、花を咲かせられるように、これまでに201件の事業に対して助成金を出し支援しています。

世界ジオパーク・塩の道における観光交流 (NPO 法人女性みちみらい上越)

■日本風景街道「北アルプス大展望・

最長最古の塩の道ルート」の概要

日本列島の真ん中にある南北350kmの「塩の道」は、新潟県糸魚川から南下して長野県塩尻までの北塩ルート、静岡県御前崎・相良から北上して塩尻までの南塩ルートを持つ日本最長最古の塩の道ルートです。北塩ルート120km沿線で地域活性化に取り組む団体・



行政など70団体が交流・連携し、2007年に日本風景街道「北アルプス大展望・最長最古の塩の道ルート」【北陸-第2号、関東-第14号】として風景街道地方協議会（北陸では北陸地方整備局内）に登録しました。

道をテーマに女性の視点でまちづくりを考えるNPO法人女性みちみらい上越では、観光の振興・地域の活性化を図る事業の一つとして、個人やエージェントからの問い合わせ窓口、全国からのルート相談やガイド斡旋、他ルートとの交流・情報発信など、本ルートの事務局を担っています。

■各地で盛り上がる塩の道イベント

塩の道を1日又は2、3日かけて歩くウォークイベントは各所で行われ、特に長野県内にお

いては、来年34回を数える「塩の道まつり」「北アルプス・塩の道ウォーク」などに全国からの参加者も増え、道の整備も進み、ウォーキングルートとして確立されています。



塩の道まつり（左は小谷村、右は白馬村）

新潟県側のルートでは、古道再生の活動の継続により、その一部が国の史跡に指定され、25回に渡り「越後いといがわ塩の道を歩く旅」が開催されてきました。2009年8月、糸魚川市が世界ジオパークに認定されてからは「世界ジオパーク・塩の道を歩く会」が主体となり、市民の手作りでウォークイベントを開催しています。



国史跡・大野のウトウ 越後いといがわ塩の道を歩く旅

■ルート整備への要望

事務局へのルートの問い合わせ・要望の中では、新潟県側に関することが多く、「駐車場がわからない」「限られた時間で古道を歩きたい」「トイレの場所は？」などがあります。

そこで、課題を検証・解決し、おもてなし意識を地域ぐるみで持てる環境づくりが必要であ

ると考え、ユーザー目線での塩の道調査を実施しました。

■観光客への調査を実施

5月2日、「糸魚川・塩の道起点まつり」が、世界ジオパーク塩の道を歩く会と糸魚川市観光協会の共催により行われました。この日だけの茶屋を4ヶ所設置し、飲み物や漬物のサービスなどで、参加者をもてなしました。案内看板も、イベントの時間だけ設置し、参加者が迷わないように配慮されていました。

調査箇所は、終点のJR根知駅^{ねち}。到着して休憩する参加者にヒアリングを行いました。調査項目の主なものは下記です。

- | | |
|------------|----------|
| ①塩の道へのアクセス | ②トイレの位置 |
| ③案内看板 | ④茶屋・お休み処 |
| ⑤ガイド | ⑥景観 |
| ⑦道 | ⑧雰囲気 |
| ⑨人 | |

ヒアリングの結果、駐車場の位置が不明、トイレの距離的配置をしてほしい、看板は2キロ毎に設置してほしい、山が望める地点に山名看板がほしい、今日のはぼりや人が立っていたので迷わなかったが実際は看板が必要、パンフレットにトイレや出店情報がほしいなどのご意見をいただきました。



1日だけの茶屋でおもてなし



終点で参加者へヒアリング



のぼりと木の看板は当日のみの設置



■ルート調査を実施

次に、平日、茶屋や特別案内看板の設置なしの状態の中、フォッサマグナミュージアム学芸員の宮島さんのガイドで調査を実施。あいにくの雨の中、女性みちみらい上越のメンバーが塩

の道の調査を実施しました。チェック項目は、イベント開催時とほぼ同様。主な調査結果は下記の通りです。

- ・トイレ…位置は人に聞かないとわからない、数が少ないので民家を利用できればよい、マップに記載が必要
- ・看板…糸魚川駅から起点への道案内がなく迷う、起点の道標が見にくい、分岐点に看板、キロポストが必要
- ・お休み処…距離が長いので休むところが必要、民家でのおもてなし希望
- ・景観…フォトスポット表示がほしい など



塩の道起点道標



調査の様子

■今後に向けて

調査結果を受け、今後、道の管理者へ案内看板の提案をすると共に、沿線民家でトイレや休憩スペースの提供が可能か、地元と検討を行います。貸していただける家には、目印となるステッカーを掲示し、次年度意向も協力を呼びかけていきたいと思ひます。

世界ジオパーク認定とあわせ、2015年春には北陸新幹線の開業を迎え、交流人口の拡大が期待されています。ハード整備とあわせ、地域ぐるみでおもてなし意識をもち、歓迎ムードを盛り上げていきたいと思ひます。

問合せ先

NPO 法人女性みちみらい上越
TEL:025-521-2627 FAX:025-520-4151

ふるさとの意思ある学びで拓く北信州の未来プロジェクト (長野県飯山北高等学校同窓会)

■高校同窓会のユニークな教育支援活動

飯山北高校同窓会では、2007年度から「ふるさとの“意思ある学び”」という地域の次世代リーダー育成に取り組んでいます。

地域が直面しているリアルな問題を調査・研究するフィールドワーク的な学びにチャレンジしながら、まちづくりを学ぶために必要となる意思（意欲＋基本的な考え方や学びの方法）を身につけ、まちづくりや地域政策について専門的に学ぶ大学への進学をめざす生徒を育てようという試みです。

高校同窓会による教育支援活動は全国的にもあまり例のない取り組みだと思っています。

有志生徒を募る形での事業展開となるため、生徒が集まらず実施できない年もありますが、うまく展開できた年はまちづくり・地域政策系の国公立大学への進学に結びつく着実な成果が得られています。

私たちとしては「ふるさとの“意思ある学び”」で育った卒業生が大学で更に専門的な学びを深め、卒業後は公務員やまちづくりに関わるNPO職員、社会起業家（地域起業家）等として地域に戻って活躍してもらうことを最終的な目標としており、地域の次世代リーダー育成というひとつの観点から飯山地域のまちづくりに関わる地域貢献をすすめていきたいと思っています。

■地域が直面する課題をテーマに学ぶ

今回、研究助成事業で取り組むことにしたのが、「新幹線北陸延伸をメリットとして活かす観光・まちづくり政策」をテーマとした「ふるさとの“意思ある学び”で拓く北信州の未来プロジェクト」です。

プロジェクトは2年後に迫った新幹線の北陸延伸をどうメリットとして活かすのかという飯山地域が直面している最前線の問題にチャレンジする課題解決型の学びとして企画をすること

にし、昨年までの「ふるさとの“意思ある学び”」に参加してまちづくり・地域政策系の大学に進学した卒業生（現役大学生）に協力を仰いで、高校生「まちづくりごっこ」に終わらせない取り組みとなるように、堅実な調査・研究活動を基礎として立案しました。

プロジェクトは有志大学生を募集して調査・研究活動を行う「ローレル夏期大学」と飯山北高校の有志生徒を主な対象として課外授業として実施する「ローレル文化講座」の2本立てで展開し、まちづくりの先進例に学ぶ見学研修（スタディーツアー）を双方の合同学習の場として設定し、大学生と高校生の学習交流を進めることにしました。

「ローレル夏期大学」には観光・まちづくり政策を本格的に学ぼうとする大学生4名、「ローレル文化講座」には飯山北高校1・2年生の5名が参加してスタートしました。

■スタディーツアーで大地の芸術祭を見学

プロジェクトは、8月20日の見学研修から始まりました。まちづくりの先進例として見学したのは、新潟県十日町市（越後妻有地域）で開催されていた「大地の芸術祭」というアートイベントです。

十日町市はかつて飯山市とも市民レベルの交流があったようですが、現在はそうした交流も失われており、50日余の開催期間に50万人もの観光客を集めるといわれるこのアートの祭典を知らない飯山市民も多いのです。

新幹線の北陸延伸をメリットとして活かすには、JR飯山線や国道117号で結ばれた越後妻有地域の存在はとても重要であり、広域観光連携（地域間連携）の可能性を考える学びの場として位置づけて見学しました。

中山間地の空き家や廃校を舞台として展開される現代アートの世界を初めて見る大学生や高校生は、数々の芸術作品に圧倒されているよう

でしたが、大地の芸術祭を展開するNPO越後妻有里山協働機構の説明に熱心に耳を傾けていました。



絵本と木の実の美術館で学芸員の天野さんからお話を聞く



芸術祭を展開するNPO職員の桑原さんからお話を聞く

十日町市役所も訪問し、新幹線北陸延伸で利用客の大幅な減少が想定される北越急行の問題やJR飯山線の利用促進に対する取り組みについてもお聞きしました。

大地の芸術祭というユニークなまちづくりで成功しつつある一方、新幹線の北陸延伸が大きなデメリットになりかねない十日町市との地域間連携は、飯山地域としても検討すべきテーマであると学びました。

■夏期大学での調査・研究活動成果を提言に

合同見学研修を終えた後、大学生は湯沢町と上越市を訪問してヒアリング調査を実施しました。

3県7市町村にわたる広域観光連携にとりくむ湯沢町では観光協会の皆さんから「雪国観光圏」というブランド化の取組みについてお聞き

し、併せて飯山地域との地域間観光連携の可能性などについてもお聞きしました。

上越市でも新幹線駅の開業に備えたまちづくりの基本戦略などをお聞きし、これらのヒアリング調査を基にして長野県観光部や長野市、妙高市、そして飯山・中野地域の市町村を訪問するヒアリング調査に取り組みました。

こうした活動により得られた成果は「飯山市が進める広域観光連携の試みは、周辺市町村との思惑（観光戦略）と違いがあり容易ではないこと」「県内市町村や妙高市、上越市との連携だけでなく、新幹線の北陸延伸で影響を受ける十日町市や湯沢町などとの地域間連携にも取り組む必要があること」「越後妻有地域は現代アートが点在する魅力的な観光エリアとして注目をされており、飯山新駅を起点に越後妻有地域を観光した上で十日町駅からほくほく線で越後湯沢駅へと抜ける観光ルートの開発を考えてみる価値があること」「観光・まちづくり政策として越後妻有里山協働機構のような力のあるNPOを育てることが重要であり、飯山市もそのための人材育成を進める必要がある」といった内容の政策提言として最終報告書にまとめています。

■高校生の取り組みはこれからが本番

高校1・2年生はクラブ活動がオフ・シーズンとなる冬場が大切な学びの場となります。

ローレル夏期大学の成果を踏まえ研究活動を展開し、2月16日に開催する大学生との合同報告会でその成果を発表する予定です。

東日本大震災と福島での原発事故を受け、生まれ育った地域に愛着をもち、地域の再生に取り組みたいと考える若者が増えてきているようです。私たちがこれまで取り組んできた「ふるさとの“意思ある学び”」が、そうした若者の学びの場となれるように、さらに歩みを進めていきたいと思います。

問合せ先

長野県飯山北高等学校
TEL:0269-62-4175 FAX:0269-81-1072

北陸再発見

糴と米でつくられる甘酒「糴ドリンク」

二年詣、初詣の帰り冷えた体を温めてくれる甘酒。
糴と米だけでつくられた甘酒の洗練された濃厚な味は、世代を越えて愛される
まちの味となり、門前通りの平成の茶店には一年を通して数多くの人が訪れる。



■塩糴ブーム

麴は、蒸した米や大豆、麦などの穀物に麴菌を繁殖させたもので、みそ、みりん、日本酒などの発酵食づくりに欠かせない。

一般的には「麴」と記されるが、原料に米を使ったものを「米に花」、「糴」とも表記している。

かつてはどこの町にも麴屋さんがあり、日本の食卓に欠くことのできない食材だったが、味噌や醤油、漬物を手作りする人が減り、麴は家庭の台所から姿を消していった。

しかし、一昨年あたりから塩糴を使うと肉、魚が柔らかくなり、旨味が増すと日本の伝統的調味料「塩麴」が注目され、麴の魅力が見直されている。

麴を使った飲み物「甘酒」も、麴ブームに乗り、各地の酒蔵、味噌蔵などで造られ人気が高まっている。

■2つの甘酒

甘酒はつくり方が2種類ある。

ひとつは、糴と米を発酵させることによって生まれた自然な甘味が味わえる甘酒。もうひとつはアルコールを含む「酒粕」を湯で溶いて砂糖を加え甘味を出す甘酒である。

米と糴からつくる「甘酒」は「飲む点滴」とも

いわれるほど栄養価が高く、江戸時代には夏の暑さ対策として飲まれ、俳句では夏の季語にもなっている。

コウジ菌の酵素のひとつ「デンプン分解酵素アミラーゼ」で米の主成分デンプンが分解されるとブドウ糖となり、これが糴の甘さとなる。

2009年7月から、新潟市古町二番町で糴にこだわり、糴100パーセントの甘酒を販売している「古町糴製造所」では、糴からつくられアルコールを全く含まない子どもでも飲める飲み物として「糴ドリンク」と呼んでいる。

■糴のバックグラウンドを守る

古町糴製造所の店主の葉茸正幸はぶきまさゆきさんは新潟県出身で、東京でおにぎり屋を展開する会社の社長でもある。

食材の勉強で新潟の酒蔵や味噌蔵を訪ねる中、一杯の糴と米だけでつくられた甘酒と出会い、砂糖を加えず、糴の力だけで引き出される米の甘味に驚き、糴の魅力に取り付かれた。

そして日本の発酵食品の原点でありながら、光を浴びてこなかった糴そのものの価値を伝えるだけでなく、地域の財産ともいえる蔵や、糴を作り上げる技術を残す役割を担いたいという具体的な思いへと変わっていった。

ちょうどその頃、「米を使った事業を起こし、寂しくなった商店街を元気づけてほしい。甘酒屋はどうだろう？」という話が新潟市上古町の恩人からあり、不安を覚えつつも運命的な使命を感じ出店することになった。

店で使用する糰は、新潟コシヒカリの食用米の中でも一等米と呼ばれるお米に限定して、新潟県内の老舗の味噌蔵・酒蔵にお願いして特別につくってもらっているそうだ。



■糰でまちおこし

白山神社に通ずる古町通りは郊外型店舗の進出で活気を失っているが、「上古町」と呼ばれる一番町から四番町は、数年前から若者が個性的なファッションの店などを開き、少しずつ元気を取り戻している。



古町糰製造所は、古町通りから、気軽に人が入れるよう、開店している時は、戸は閉めずのれんをさげている。

11時開店と同時に何人ものお客が訪れた。年配の方にとってはなつかしい味で、常連も多い。また若い人にとっては、米と糰だけでつくりだされる甘味は驚きの味だという。

冷たい甘酒（糰）をいただくと、すっきりとした甘味で後味もさわやかだ。

古町糰製造所 古町本店店長 櫻井里香子^{さくらいりかこ}さんによると天気やイベント等の開催によりお客様の人数は増減するそうだ。

週末ともなれば、観光客や情報誌などを見てきた人が立ち寄り、店内はたちまち窮屈に感じられるくらいである。

年末は二年詣にあわせて夜10時から2時まで開店し通りは大いに賑わうという。



「店内の壁は『糰』をつくる時に使われていた道具『こへぎ』を張り巡らせています」と 櫻井店長

白山神社の門前町に店舗があることから命名された「神社エール」は糰ドリンクに生姜を加えた定番。他にも季節にあわせたオリジナル糰ドリンクなどが販売されている。

糰にこだわり、糰でまちに元気を取り戻そうというコンセプトは上古町の新しい魅力として醸成されているようだ。



クリスマス用にディスプレイされた「神社エール」

取材協力

古町糰製造所
新潟市中央区古町通二番町 533 番地
TEL:025-228-6570 FAX:025-228-6571
メール:info@furumachi-kouji.com
営業時間 11時～18時 定休日:月・火

シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

須坂の宝を次代へ伝える「須坂景観づくりの会」

昨年、蔵の町 須坂で「須坂景観づくりの会」を設立し、須坂の景観づくり、郷土愛の育成に取り組んでいる、同会理事長 こばやしよしのり 小林義則さんからご寄稿いただきました。

■須坂の町を元気にしたい

明治初期から昭和初期にかけて繭から生糸を紡ぐ製糸業によって栄えた須坂市には、現在も町の至るところで当時の面影を見ることができ、製糸業によって巨額の富を得た豪商が建造した蔵づくりの建物が歴史的建造物として多く残されています。



しかし近年、須坂市でも商店街の空洞化と人口の減少により、須坂の町は元気を無くしつつあります。町の衰退と共に個人商店も衰退をしていきます。これ以上衰退をしないために、どうかしなければならなかったとき、自分自身が生まれ育った地域のことを何も知らないことに気が付きました。

須坂市で生まれ育ち、高校卒業後2年間県外の学校に進学した後、地元に戻り、家業を営んでみて私の店のような個人商店は地域と共にあることを学び、より深く地域のことを学ぼうと行政が企画する郷土史などの勉強会に参加するようになりました。

須坂について学べば学ぶほど、生まれ育った須坂の素晴らしさに気づかされ、これはもっと多くの人たちに知っていただければならないと感じました。

私のような年齢の者が地域の学習会に出ることは稀のようで、企画側や参加者からの誘いもあり、家業の傍ら観光ガイドを務めるようになったのです。

町のガイドすることで、町に元気が無いことを改めて実感させられるとともに、須坂の町に眠っている宝をどうにか生かして町を元気にできないものかを考えるようになりました。



須坂の中心市街地には個人の商店が未だ多くあり、私のように家業を継ぐ同級生、同窓生が多くいます。彼らに歴史的建物や町並みの魅力、そして今の町の状況を話し、これからの須坂を元気にしていくのは我々しかいないという私の気持ちを伝えたところ、嬉しいことに「一緒にやろう」と皆が即答してくれました。

こうして、長野県須坂市の景観づくり事業を通じて、須坂市の自活力の増進と郷土愛の育成を目的に須坂の若手経営者が組織する「須坂景観づくりの会」の発足に至ったのです。

■まず「黒壁プロジェクト」で意識向上

以前、民間が主導し町おこしに成功したという町を訪問したことがあります。

それは新潟県村上市で、観光客ゼロだった町がたった数年で年間20万人もが訪れる町へと変貌したのです。その立役者が吉川真嗣さんきつかわしんじ。数回、村上市に行き吉川さんとお会いし、彼が企画した黒壁プロジェクト、町屋再生プロジェクトについて話を聞くことができました。

そして、須坂景観づくりの会の第一事業として、吉川さんのご指導の下、須坂黒壁プロジェクトを発案したのです。

須坂の町に残された歴史的建造物は、町のあちらこちらに点在していることからなかなか人の目に触れることがありません。しかしそれら歴史的建造物は、須坂の町を縦に通る太い街道を結ぶように作られた細い道、小路によって結

ばれているのです。

我々はその小路に目をつけ、今はブロック塀などにより色もデザインもバラバラの家並みが続いているその小路の両側を板塀や格子戸などによって統一した景観にしようと企画しました。

景観が整うことで人が通らなくなった小路の魅力が再認識してもらうきっかけになり、観光客にも歴史的建造物を見学するように歩いてもらえるのです。

現存するブロック塀には板を張る工事を施し、老朽化の進んだ板塀は撤去し、より趣のある板塀を設置します。塀だけではなく壁への色塗りや格子の設置なども行うことから「黒壁プロジェクト」と名前を付けました。

住民の意識向上を目的に、6月には、吉川真嗣さんを須坂にお招きして、町づくりの思いや苦悩についてご講演いただきました。吉川さんの熱き思いと我々の須坂に対する思い、須坂景観づくりの会がこれから行っていく事業について住民に知っていただきました。



7月と11月に黒壁づくり事業を行い、合計60mほどの黒壁が設置されました。

安全上の理由からプロの大工に設置施工を依頼しますが、仕上げ作業である板塀への色塗りは地元住民と子供たちの手によって行います。自分たちの手で町並みを作ることで、町への愛着と誇りを生み、そして郷土愛へとつなげようと考えたからです。

自宅ではハケを使ったペンキ塗りを行わなくなった現代、色塗り作業に参加した子供は、その場所を通る度に「ここは俺が塗った場所だ」と誇らしげに言うそうです。参加した大人たちも「貴重な経験となった。須坂の魅力が再認識できた。これからは友人、家族にも紹介したい」と言ってくれます。

たった60mの黒壁づくりですが、確実に地元で愛される町並みになりつつあると感じています。



■地域の宝を再発見、再認識し郷土愛を育む

須坂市は小さな町や村が合併を繰り返してきた歴史があります。その歴史的背景から中心市街地といわれる旧須坂町以外の地域にも素晴らしい歴史と文化そして景観があります。それらは地元住民にとっては当たり前のものですが、周囲から見たら宝とも思える文化財や町並みなのです。

須坂景観づくりの会では、旧須坂町だけではなく須坂市全域の魅力を再発見し、より多くの方々にそれらを知っていただけるように事業を進めていこうと考えています。

市の発展や町並みの保存を望む心は郷土愛の精神があって初めて芽生えます。

我々は須坂市内の景観づくり事業を通じて、須坂を愛し、須坂を大切に想う住民がより多く現れてくれることを願います。

今から30年ほど前、須坂市に「信州須坂町並みの会」が発足し、歴史的建造物の保存活動を行いました。その活動があり今も須坂には歴史的建造物が多く残されています。信州須坂町並みの会において活動していたのは須坂景観づくりの会理事の親の世代です。

我々は親が町を大切に想う背中を見て育ってきたのです。そして、我々は現在、親となる歳となっています。

我々は次の世代にどのような背中を見せることができるのか。

末永く後世にまで須坂の町並みを伝えていけるよう活動を続けていきます。

問合せ

須坂景観づくりの会
理事長 小林 義則
長野県須坂市大字須坂 252-4
TEL:026-245-7467
<http://www.suzakamap.com/project/>



シリーズ「次世代に向けた地域の魅力づくり」

世界のステージで誇れる表情豊かなまちづくり「岩瀬まちづくり(株)」



富山駅から富山ライトレールに乗って20分ほど、東岩瀬で降り歩くと、整然とした美しい家並みに出会う。

2004年に岩瀬まちづくり(株)を立ち上げ、独自の感性でまちづくりを進めている榎田隆一郎ますだりゅういちろうさんからお話を伺った。

■生き方・暮らし方がまちの表情になる

富山市岩瀬は、神通川河口付近にある町で、江戸中期から西回り航路の北前船の寄港地として、廻船業が栄え、巨大な富を得た廻船問屋が軒を連ねる古いまち並みが残されている。

岩瀬大町通りには、北前航路最盛期の明治初期に建てられた五大家、馬場家、米田家、森家、畠山家、宮城家という大廻船問屋の伝統的建造物が並んでいる。

榎田さんは、その通りにある明治26年創業の造り酒屋「榎田酒造」の5代目当主でもある。



月に一度は海外を訪れるという榎田さんは、「日本のまちは点で見ると美しい建物がたくさんあるのに絵にならない。

それに比べ、欧米のまちは面で美しい。

本来、日本人は繊細な美のセンスを持ち、江戸時代には各地で個性ある美しいまちが形成されていた。

しかし現在は、まちの環境のために自転車に乗り、真面目に本を読み、正しく生きようという感性が欧米人より低いように感じる。

美しいまちで生活していれば、自然とまちを美しくしようという気持ち生まれ、まちに愛着や誇りを持つようになる」と住む人たちの生きる姿勢、暮らし方がまちの表情なるのではないかという。

■自分から動きまちを変える

欧米のまちの美しさに刺激された榎田さんは、日本の多くのまちで保存したい空き家や老朽化した家が売買され、ビルや駐車場となり美しい街並みが喪失されていく状況を見て、自分たちで岩瀬の伝統的家屋を購入し景観を守るしかない、出資会社を立ち上げた。

するとこれまで家の売却を躊躇していた人達も、榎田さんを信用し、岩瀬のまちづくりに役立ててほしいと売却してくれた。

行政も家屋修繕の助成や電線の無電柱化などを支援してくれ、次第に魅力的なまち並み整備の成功例として紹介されるようになった。

「どうすれば岩瀬のようになるのか」とよく聞かれるが、それに対して「まず動いたらどうですか。思っているだけ、言っているだけでは何も変わらない。誰かがやってくれることを待っていては何も始まらない。

資金がなければ足を使い、一口5万円で寄付をお願いし、1,000口集まれば5,000万円になる。行政もそんなに住民が頑張っているのならバックアップしようと考えてくれるようになる」と答えるそうだ。



森家の土蔵を改修し、つくられた工房。若い作家の住居もじっくりまちに溶け込んでいる。

■人の魅力でつながる

現在、使われなくなった土蔵を改修し、若い作家たちに工房として賃貸している。

最初に来たガラス作家を慕って彫刻家が来て、その彫刻家を慕って、また人が集まるようになり、人が人を呼び「岩瀬に住みたい」と次々と若い作家が移住し、その家族たちが新しいコミュニティをつくりだしている。

ガラス作家の安田泰三やすだたいぞうさんは、神戸市出身で富山ガラス造形研究所の第1期卒業生。

レースガラスの技法と和の感性を融合させた花瓶などの作品は世界一流のお客様から高い評価を得ているそうだ。

また、陶芸作家の釈永岳しやくながくさんは新しい作品づくりに取組んでいる真最中だった。

頼られ、若い作家の住居を探し修復し、時間があれば工房に立ち寄る榎田さん。国内外の人、

まち、文化や芸術と接してきた確かな眼は作家たちから大きな信頼を寄せられている。



安田さんの工房兼ギャラリー



制作中の釈永岳さん

■まちの未来をつくる

作品を求め各地から人が訪ねて来るようになり、工房は新しい岩瀬の魅力を発信している。

岩瀬を訪れる人たちには目的を持って来てほしいと、作家の工房見学は原則予約制としている。しかし、ぶらりときた人から「がっかりした」との声もある。

このため町家を改修し、作家の作品を並べたセレクトショップと休憩所をつくり、海にフィッシュマンパークをつくらうかと考えているが、逆に人が来過ぎてせつかくこれまで築いてきたまちの景観を損なうことにならないかと、これからのまちの方向性を思案している。

同じベクトルに立ち、進むことができる若い仲間と過ごす時間が一番楽しいという榎田さん。

住んでいる人の人間力がまちの表情となり、魅力となるまちづくりは、まさに正念場を迎えようとしている。

取材協力

岩瀬まちづくり(株)
富山市東岩瀬町 269
TEL:076-437-9916

TAIZO GLASS STUDIO
富山市東岩瀬町 102
TEL:076-426-9340

会員だより

瑞宝小綬章

船越 洋一 氏
(兵庫県川西市在住)

元北陸地方建設局
道路部長



思い出

この度、秋の叙勲で思いもかけずに受章の栄に浴しました。これもひとえに、現役時代にご支援、ご協力いただいた諸先輩、同僚、後輩の皆様のおかげと感謝しています。

思えば昭和49年4月に初めて新潟国道事務所に赴任して以来、北陸地方建設局では通算11年間、仕事をするようになりました。新潟国道工事事務所、高田工事事務所、道路部で道路関係を中心に関係の皆さんの協力をいただきながらいろいろ仕事に従事させていただきました。

今思うと当時のことがいろいろと思い起こされます。

雪国の北陸では雪害対策が重要課題で、あれこれ取り組んだこと、災害関係では昭和53年の妙高の地滑り災害、18号台風による関川の洪水、59豪雪などで走り回った思い出が、当時の関係の皆さんの顔とともに頭の中をめぐります。

洪水では勤務中に突然宿舍の床上がりぎりまで浸水し、豪雪では平屋の宿舍が一面屋根まで雪で埋まり4回も屋根雪おろし(雪あげ)をするはめになり、家内が驚愕したことなどが今でも我が家で時折話題になります。

同時に家庭のことはほとんど家内にまかせっきりで、随分と苦勞をかけたとは今は反省しています。ゆえに今回はいわば戦友たる家内共々、伝達式に出席しました。

災害も一段と頻発、過酷になり、道路特定財源の廃止など仕事の体制や環境も大きく変化し、現役の皆さんのご苦勞は計りしれませんが、これまで以上に国民の声を聞きそのニーズに応える仕事を大いに期待しています。

最後に、当時に比べ、体力、気力とも落ち込み、腰痛もありゴルフはやめ、趣味のダイビングを続け、寝たきりにならないよう水泳、ハイキングで足腰を維持し、アルツハイマーの防止のため、新しい趣味にも取り組んで四苦八苦している近頃です。

以上、ご報告方々、はるか川西の地からご挨拶申し上げます。ありがとうございました。



59豪雪。この下に我家あり！



伝達式帰りの東京見物

「平成24年秋の叙勲」で、栄えある勲章を船越洋一氏、金谷進氏が受章されました。
長年のご功績が顕彰されたものであり、心からお祝い申し上げます。

瑞宝双光章

金谷 進氏

(石川県野々市市在住)

元北陸地方建設局
羽越工事事務所長



現役時代を想い出すまでに

このたび、平成24年秋の叙勲で思いもよらぬ受章の栄に浴し、24年11月7日に国土交通大臣から勲章・勲記の伝達を受けてきました。これもひとえに現役時代を支えて頂きました多くの上司、先輩、同僚の皆様方のご指導・ご支援の賜物と厚く御礼を申し上げます。

さて、現役時代を振り返ってみますと昭和34年3月31日金沢駅から新任地の新潟県新津市に向けて、心細い思いを抱いて出発したのを思い出します。以後、北陸地方建設局で新津工事、新潟国道、企画室（当時）、富山工事、道路部、企画部、再び新潟国道・道路部・企画部と勤務し、最後の勤務地となった羽越工事まで13カ所の職場に勤めさせていただきました。

新潟国道では大野～白根バイパス、新発田バイパス、三条バイパス等々、毎日、毎日直営の測量作業に従事しておりました。

また、新潟地震当日に、新潟市内の国道7・8号沿線の被災状況の写真撮影を指示されて新潟市の関屋～阿賀野川付近まで徒歩で写真撮影を命ぜられ、その夜から数か月間復旧工事に従事しました。

企画室勤務時は調査調整費調査で「能登半島地域開発計画調査」に従事し、調査費要求で本省、当時の経企庁まで要求内容説明に行きました。

同一事務所で長く勤務したのは富山工事で、

昭和47年4月から7年間在任し、この間、調査第二課、工務第二課で道路調査係長、計画係長、設計係長、工務係長の4つの係長を経験させていただきました。当時の富山工事の道路事業は、国道156号の一次改築が最盛期で予算も毎年度30億円から50億円の予算だったと記憶しております。

昭和60年から長岡国道事務所での2年間は、西山バイパス（延伸）、出雲崎バイパス、小千谷バイパス、国道353号権限代行区間事業など新規事業が多くあり、ほとんど地元説明の明け暮れだったことが思い出されます。

また、金沢工事の道路管理課勤務の昭和63年に浅野川大橋の補修工事で、大正時代に架設された当時の高欄、橋側壁、照明に復旧しようと言うことで当時の図面を探し出して施工し、地域及び町内の方々に大変感謝されました。

2回目の道路部道路工事課勤務の時、入札契約制度の改革があり、それまでの指名入札主体から、工事希望型、公募型、一般競争入札などが導入され、北陸地方建設局は全国初の一般競争入札導入で高田工事の「妙高大橋」を実施し、手続き等の慣れない作業で苦勞致しました。

最後の羽越工事では、羽越災害から30年の年に当たり記念事業を盛大に実施したことを思い出します。

勤務リタイア後の現在は、もともと読書が好きだった事もあり、1日1冊のペースで乱読の生活をしております。

最後になりましたが、こうした気ままな生活をしておりますのも、これまでに叱咤激励していただきました皆様方のおかげであり、感謝感激の極みであります。どうもありがとうございました。

伝言板

12月～3月に弘済会が主催・共催、後援等で行う一般参加型公益事業です。
お時間をみつけ、お立ち寄りください。

イベント名	期日	開催地	会場	内容	代表問い合わせ先
平成24年度 「防災とボランティア週間」 防災講演会	1月17日(木) 14:30～17:15	新潟市	チサンホテル新潟 4F「越後」 定員130名	講演① 「東日本大震災支援活動 マネジメントについて」 講師：山内 芳朗 氏 (社)東北建設協会 地域事業部長 講演② 「防災エキスパート 支援活動について」 講師：信太 武 氏 東北地方防災エキスパート 講演③ 「最近の雪害の現状と対策－地震と 大雪の複合災害と雪氷災害予測－」 講師：上石 勲 氏 (独)防災科学技術研究所 雪氷 防災研究センター 総括主任研究員	北陸建設弘済会 企画部 TEL:025-381-1160 申込締切： 平成25年1月8日(火)
第7回 社会資本整備 セミナー	2月1日(木) 13:30～16:00	新潟市	新潟県建設会館 5F「大会議室」 定員200名	北陸地域における今後の社会資本 整備の方向性等についての講演 ①「最近の国土交通行政の 取り組みについて」 講師：国土交通省北陸地方整備局 担当官 ②「北陸新幹線建設の新技术と 展望について(仮題)」 講師：(独)鉄道建設・運輸施設 整備支援機構(鉄道・運輸 機構)担当官	北陸建設弘済会 技術部 TEL:025-381-1882 申込締切： 平成25年1月24日(木)
	2月4日(月) 13:30～16:00	富山市	富山国際会議場 2F 「203・204 会議室」 定員120名		
	2月5日(火) 13:30～16:00	金沢市	石川県地場産業振 興センター 「第3 研修室」 定員100名		
	2月6日(水) 13:30～16:00	長野市	長野バスターミナル 会館「芙蓉・寿」 定員80名		
南砺・ 利賀そば祭り	2月9日(土)～ 2月11日(月)	南砺市	南砺市利賀村上百瀬 利賀国際キャンプ 場周辺	・利賀そばやごへいもちをはじめ 岩魚塩焼き、赤かぶ漬けなど 利賀のごちそうが味わえる ・伝統行事「丑曳(うしひ)き」 ・高さ10メートルを超える大雪像、 花火などのステージショー	南砺利賀そば祭り 実行委員会 (南砺市利賀行政センター) TEL:0763-68-2111
第17回 「北陸地域の 活性化」に関 する研究助成 事業報告会	3月13日(水) 14:00～17:05	新潟市	チサンホテル新潟 4F「越後」 定員120名	第17回「北陸地域の活性化」に 関する研究助成事業11課題の成 果報告会	北陸建設弘済会 北陸地域づくり研究所 TEL:025-381-1054 申込締切： 平成25年3月4日(月)

防災講演会・社会資本整備セミナー・研究助成事業報告会の詳細はホームページ <http://www2.hokurikutei.or.jp/> でご確認ください

編集後記

新年おめでとうございます。
今号シリーズで榊田隆一郎さんの「言っているだけ、思っているだけでは何も始まらない。まず自分が動けば周りも変わってくる」というお話に地域活性化の原点を再認識しました。
地域を元気にしたいと頑張っている方々を応援しようと、現在、平成25年度の「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業を募集しています。地域活性化のアイデアをお待ちしています。
(事務局)

こうさいだより 通巻第96号

発行 平成25年1月1日
編集 社団法人 北陸建設弘済会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025) 381-1054
FAX (025) 383-1205
HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>